

元山の思い出！ 終戦そして脱出

大阪府 竹 口 昌 子

はじめに

この記録文は、北朝鮮の元山府泉町国民学校の元教師、村上清先生の、「あの戦争の悲惨さを風化させることなく、後の世代のために語り部となるように……」との教えに従って、終戦当時二年生の幼い頭に残る記憶の断片を、拙い文章にしたためたものです。

かつて、日本人がこのような歴史を歩んだよすがに、また当時あまりにも幼くて、母や兄弟姉妹がこんな経験をしたことすら記憶していない私の弟や妹に読んでもらいたいと願って、慣れないワープロのキーをたたきました。

テレビで放映した「大地の子」を、涙なしに見れなかった日本人は数多いと思います。どうか、この後の世界中の人々が、争いのない、平和な時

代を生きられることを、心から願わずにはいられません。

一 幼き日の思い出

昭和十二（一九三七）年四月三十日、朝鮮咸鏡南道元山府本町二丁目九番地に、寿司屋「いさみ」の長女として、私は生まれました。幼かった私の記憶に残る元山の思い出は数多くはありませんが、そのときどきの断片的な出来事が思い出として浮かびます。就学前の記憶は四月、お釈迦様の花祭り、ことに私が幼稚園のときの象の張子を中心に、きれいな花車がたくさん元山の街中を練り歩いた花祭りは、とても賑やかだったこと。千内里でのサクランボ狩りも、毎年の行事でした。そして何といつても、どこまでも白砂青松が続く美しい松涛園での海水浴は、夏の大きな楽しみでした。

川の名前は憶えていませんが、流れの速い、川底の小石まで見える、透き通った川での蜆採り、夏の棧橋での精霊流し。灯籠を流すとき、私の母はいつも「魂が内地まで届くのよ」と申しました。

校の正門に続く坂道の下にあった、とても絵の上手な石井さん、身体は小さいけれど勉強のよくできた太田富佐子さん、お姉さんが泉町校の先生だった渡辺翠さん、また、クラスは違いましたが青組にはうちの向かいの丸三呉服店の石原康子ちゃん、洋食「アンクラ」の長戸ひさ子ちゃんもいました。

二 父に召集令状

その年の暮れ、私たちの父に召集令状が届き、大晦日には家族一同で、除夜の鐘とともに、神社に初詣をかねて父の武運長久を祈りました。

昭和十九年四月、いよいよ私も赤煉瓦造りの美しい泉町国民学校に入学。一年白組、先生は軍人のような、一年生の担任としてはとても厳しい川上先生でしたが、六、七月ごろ出征されて安西先生が来られました。同じクラスには、北村歯科医院の元子さん、仲町の玩具屋さんの安富のミッチャン、同じく仲町の漬物屋の足が悪かった男の子、我が家の裏通りに住んでいた本浦孝一さん、私の記憶ではお父様が女学校の先生（校長？）で、学

明けて正月二日、父は、今思えばおそらく父をただ一人の頼みとして、昭和十年に内地から嫁いで来た母（従兄妹同士）と、兄を筆頭に母の胎内にいた妹など、五人の子供たちに心を残しながら出征して行きました。冬休みが明けて、始業式の朝礼で校長先生が「皆さんのお友だち、三年生の白石哲三君と一年生の昌子さんのお父さんが、皆さんの勉強に役立ててほしい、と二百円を本校に

寄贈して出征されました」と話されたとき、何か切なさのようなものを感じたのを思い出します。

二年生になり、担任は初めて女性の金本先生^{きんもと}。修身の授業で使われた「小野道風と柳に飛びつく蛙」の掛け軸を、授業後に片付けるよう先生に指示され、私がそれを小脇に抱えて「お豆腐！ お豆腐！」とおどけて、先生に優しくたしなめられたことや、梅雨のころ、公会堂で開かれた兵隊さんを慰問する催しで、原稿用紙の枠目一つ一つに赤丸をつけてくださった綴り方を朗読したことなど、たった一学期だけの二年生でしたが、それなりの思い出がありました。

学校の生活もだんだん慌ただしくなり、毎日のように三年生以上は松根掘りなどで教室にいないことが多く、私たち一、二年生は空襲警報発令時の訓練ばかりが続く毎日でした。

三 八月十五日

そして夏休みのある日、私は北村元子ちゃんの家へ遊びに行っていました。二人でお人形ごっこ

をしていると、元子ちゃんのお父さんが「元子、この回覧板をお前が自分で全部の家に回して、読んでもらいなさい」とおっしゃいました。元子ちゃん和我と一緒に回覧板を回して帰ってくると、近所の人々が次々に北村さんの家に集まって来ました。応接間の大きな電蓄の前に人々が立って、ラジオから流れてくる声を聞いていましたが、やがてすすり泣きが始まりました。幼い元子ちゃんも私も、それが何を意味するのか分からず、大人が泣くのを不思議に思っただけから見上げていましたが、何となくそこにいるのが悪いようでその場を離れました。

それから私は、学校の坂道の途中にあった営林署の官舎（その当時の署長、山地のおじさんは、偶然にも母の内地の小学校での同級生でした）に寄りました。いつごろか定かではありませんが、門から私の兄が大きな声をあげながら入って来ました。「おばさん！ 日本は戦争に負けたよ！」「哲ちゃん、嘘でしょ？」「ううん、本当だよ。ラ

ジオで陛下がおっしゃったんだ！」そこで、おばさんは急いでラジオをつけました。ラジオが何を言っているのか私には分かりませんでしたがおばさんと兄が泣いていました。今でもあの時の、生垣の門から入ってくる兄の姿と、その上にあつた抜けるような青空を鮮やかに思い出します。

それから、二、三日か、あるいは四、五日経ったところ、また私が知り合いの家に出掛けていると、兄が恐い顔をして迎えに来ました。家に帰ると、母にたいそう叱られました。近所の家々は一斉に窓や入り口を、木材などをあてがって釘付けにしました。ロスケの進駐の光景を、二階の窓の隙間から恐る恐る覗いてみたのを思い出します。

敗戦とともに、店は商いも当然止まり、店の使用人だった朝鮮の人は、母に何かと難題を持ちかけてきましたが、当時、父が独身時代に勤めていた飯山洋服店にいたオモニで、父が独立するとき、しっかりした使用人を、と飯山のご主人が父に付けてくれた「飯山オモニ」と呼ばれていた四、

五十歳代のおばさんが、「みんなタイシヨウに世話になったのを忘れたのか」と、何かにつけて母をかばってくれました。ときには食べ物を調達したり、また暮らしのために衣類を手放す手伝いをしてくれたりと、私たちが引き揚げるその日まで続きました。朝鮮戦争が始まったころ、母はよく「オモニは、生き延びてくれたかしら」と心配していました。

敗戦で治安の悪化したあの地で、身寄りのない母を心配して、お向かいの安富さんのおじさんがとても気遣いしてくださいました。ロスケの進駐後、危ないからと、夜は私たち親子を自宅に泊めてくれたりしました。また、後日引揚げの時には、道中のための運動靴を手配して下さいたり、本当にお世話になりました。

終戦の直後九月六日、母は月満ちて妹の光子を我が家の二階で出産しました。そのときも、オモニは心細い母に付き添っていてくれました。ある昼下がりのこと、突然一人の大きなロスケ

が表から入って来て、「マダム イツソ? マダム イツソ?」と小指を立てて言いました。そのただならぬ心配は子ども心にも感じられて、私はとても心配でした。そのとき、飯山オモニはものすごく険しい形相で階段の下に仁王立ちとなり、「マダム オブソ! マダム オブソ!」と必死で大声をあげました。ロスケは威圧されて、そのまま立ち去りました。オモニは一人で母を守ってくれたのです。

あれは十一月ごろ、緑町の「第二いさみ」の安達のおじさんが「日本に帰ることにしたが、一緒にどうですか?」と言ってきましたが、その準備が整っていない我が家は無理なので、母は「跡取りの哲三だけは、必ず日本へ帰りたいのでお願いします」と、おじさんに兄を託しました。

安達さん一家は船で脱出を図ったのですが、初めてのは失敗に終わり、兄は家族の許へ帰ってきました。その後、安達さん一家は再び船での脱出に成功するのですが、おじさんは「奥さんた

ちをそのままにしては、白石さんに申しわけが立たない」と、私たちの準備が整うまで一人残ってくれたのです。これは私の勝手な想像ですが、父が出征する時に、おじさんと父の間で何か約束事があったのかもしれないと考えます。

四 父の消息

そんなある日、終戦までの毎日、我が家に入りにしていた魚の行商をしている朝鮮人のおばさん「さかなオモニ」が、母を訪ねて来ました。その人は戦後、脱出する日本人を手引きして、南朝鮮に連れ出すのを仕事にしていたのですが、あるとき京城の町でばったり「タイショウに会った」と言うのです。父が私たちを迎えに元山に戻ると言うので、「今、北朝鮮はとても危険だから、一度私に戻って奥さんに聞いてきてあげる。タイショウはここで待ちなさい」と押し留めたそうです。そして、母に宛てた父の手紙を持って来ました。

その当時兵役に就いていた人や警察官などは、次々にシベリア送りになっている状況でした。名

前は忘れましたが、巡査をしていた私のクラスメートのお父さんも連行されました。それで母は「私たちは何としても日本に帰り着く。せつかく南朝鮮にいるのだから、あなたは一足先に帰って待っていてください」と、再び京城に向かったオモニに手紙を託しました。妻子の身を案じつつ、父は十一月の末に帰国したそうです。

それからしばらくして、私たちの住んでいた家は北朝鮮の当局に接収され、太閤堂（料理旅館）の二階の一室に移りました。そこには、本浦君一家も廊下の斜め向かいの部屋に入ってきました。

ともかく、お金の入る手立ては、持っている衣類を売るぐらいのことしかなく、母は風呂敷に包んだ着物を、赤ん坊をおんぶしているように見せかけるためにねんねこでくるみ、朝鮮の人に売りに行くのです。飯山オモニが、「昌子ちゃんにおぶわせた方が、大人がするよりもいいですよ」と教えてくれたからは、私が母の代わりに着物をおぶって行きました。また兄は、母を少しでも助けた

かったのでしょうか。だれに教わったのか、豆腐屋さんで毎日お豆腐を分けてもらい、バケツに入れてご近所に買ってもらったこともありました。そんな日々の私たちの楽しみは、夕ご飯のあと、ちゃぶ台の周りに母を中心に座って、いろんな歌を歌うことでした。そんなとき「みんないい子で嬉しいわ。絶対にそろって内地へ帰ろうね」と母は自分に言い聞かせるように、子どもたちの顔を見ながら言うのでした。

ある夜のこと、いつものように家族で歌っていると、向かいの部屋のあばさんが「静かに! 今、表の玄関で激しい音がしている!」と、押し殺したような声で言いました。びっくりした私たちが黙る間もなく、今度は私たちの部屋につながる階段の下の戸口が激しい音をたて始めました。本浦さんをはじめ、二階の各部屋の人たちが、皆私たちの部屋に集まって来て、窓から物干し伝いに、当時やはり大勢の家族が身を寄せていた建具屋さんのダルマ小林の家に逃げました。すぐに、大き

な赤い顔をしたロスケが、表通りの朝鮮の人に連れられて入って来ました。母など女性たちは、その部屋に寝ていたおあばさんの布団に顔を突っ込んで隠しましたが、「みんな顔を上げて下さい。あの人を探しているのです。その人はこの男性のお金を奪って逃げたのです」と言われて皆おぼろげと顔を上げました。ロスケはしばらく見回していましたが、何かその朝鮮人と言葉を交わした後、「これでいいです」と帰って行きました。

本浦君は食事の途中だったのか、手にお箸を握りしめたまま、私たちも歯がガタガタと震えていました。部屋に帰ると、向かいの部屋の襖が廊下に倒され、うちのちゃぶ台は階段の下に転がってしまいました。どの部屋も押入れの布団はすべて引き摺り下ろされ、まるで一瞬のうちに嵐が起こったようでした。

そのころ、回覧板が回ってきました。それには、「保安隊（北朝鮮の組織）の幹部が、有り難いことに困窮している日本人の子供を、養子として受

け入れる、と言ってくれました。ついでに、女の子をお願いすることにしたので、希望者は申し出るように」というようなことが書いてありました。

翌日町内のある男性が二人、母を訪ねて来ました。「奥さん一人で五人の子供は大変だろう。ちようどいい機会だから、昌子ちゃんか治子ちゃんをお願ひしたらどうか」と、傍に私の方をちらちら見ながら言いました。「連れて行かれるかもしれない」本当にそう思いました。母は涙を必死にこらえていましたが、男の人たちが帰ると、「大丈夫よ。心配しないで」と私を抱きしめてくれました。

その夜、安富のおじさんが来て「奥さん、今日はおの人たちが困らせたそうだけど、済まなかったね。なあに、東本願寺には、この混乱で孤児になった子供がたくさんいるから、何も心配いらないよ」と言ってくれました。母は、伯父さんの前に突っ伏して、声をあげて泣きました。

五 脱出決行

やがて年が明けて、私たちにも帰国の日が近づきました。

帰国の準備は逃避行の長引くことを考えて、衣類、履き物、食糧など、ことに生まれたばかりの妹のミルクとなる煎り米の粉や、それを溶く水飴はどうしても必要で、安富のおじさんはこれらのことでも、とてもよくお世話して下さいました。

また、十、九、七、四、〇歳の小さな子ばかりを連れての逃避行ゆえ、荷物はオムツなどかさばるものばかり。そのために、帰りたくても帰国資金がないという、ダルマ小林で働いていた美代ちゃんという若い女性と、安富さんがお世話して下さいました三十歳代の男性が手助けをしてくれることになりました。（その人は、なんでも兵隊だったのを秘していたために早く日本へ帰りたいが、やはり帰国資金がない、ということでした。そしていつも帽子を目深に被り、顔を伏せ気味にしています）男の人はすぐ大きく重たいリュックサックを背負い、夜は眠気で歩けない四歳の弟をその上

に括り付けて歩き、美代ちゃんは生後八カ月の妹を背負ってくれました。男性も女性も、引揚げは鹿児島で、昭和四十年代に、父母は九州旅行の際、この女性に再会しました。

それから、内地に帰ってもたちまち生活資金としての日本円が必要になるということで、母は飯山オモニと手を尽くして日本の紙幣を集めました。それが何円札だったかは憶えていませんが、母がさらしのような白い布で細長い袋を作り、そこに紙幣の束を横に並べて入れました。大人は身体検査があるので、子供につけるのが良いと、兄と私に腹巻のように、たくさん着込んだ服の一番内側にしっかりとまきつけました。せつかく苦労して持ち帰ったこの紙幣は、博多で没収されてしまいました。

支度がすべて整ったあと、母は私たち子供を連れて松涛園に行きました。昭和十九年の秋に一歳で亡くなっていた妹のお骨を、浜辺で枯れ枝を拾い集めて野焼きをし、絵本の一ページでこしらえ

た船の折り紙にそのほとんどを乗せ、海に流しました。「みんなより先に日本へ帰ってね」母は涙を流しました。少し残した骨を小さな袋に入れて、それは日本に連れて帰りました。

いよいよ五月四日、夕闇に紛れて、安富のおじさんと一緒に、私たちは半年近くを過ごした太閤堂を去ることになりました。飯山オモニと「アンラク」のおばさんが小さな子をおんぶして、お別れに来てくれました。母とおばさんは、「内地できっと会いましょうね」と泣きました。飯山オモニは、「哲ちゃん、お母さんを頼むよ」と兄に言いました。母が嫁いで来て以来、五人の子供の世話をすべて引き受けるなど、オモニはまるで母のお母さんのようでしたから、心から別れを惜しんでくれたのです。私たちは皆無口で足早に歩き、駅前の集合場所に行きました。

あくる日、朝早くから広場に並ばされ、持ち物検査を何度もされました。逃避行のために母が用意した毛織物などの衣類はすべて抜き取られ、ま

ました。

でも、不安は的中してしまいました。フツケイで全員降ろされ、荷物検査をされたあと、これからどうなるのかの指示がないまま長い時間が過ぎ、再び今度は石炭車で、元の方向へ乗せられました。私たちは、落胆と不安で皆呆然としていました。男の人の発案で、女性たちは貨車の床にこぼれていた石炭の粉を顔に塗りつけました。

どれぐらい走ったところか、線路を横切る道の後方から、大勢の日本人の団がこちらに近づいて来るのが見えました。期せずして、どちらからともなく「おーい！ 頑張れよー」と皆一斉に手を振り合って、泣きながら激励しました。私の目には、そのときの紅い夕焼けの空とはるか遠くの黒い山のシルエットが、今もくっきりと焼きついています。

六 或る母子

汽車は何度も止まりながら、夕方近くに「リボク」という駅で「石炭が切れたので、ここからは

た刃物も、小さな爪切り、縫い針に至るまで、写真も戸外で撮影されたものは、すべて没収されました。呼び出された順番に汽車に乗ることになりましたが、何故か私たちはなかなか呼ばれず、「このまま帰国を許されないのでは？」と母たちは焦りの色を募らせました。広場で荷物検査の最中に、北村さん一家が来ているのを見掛けましたが、元子ちゃんも私もまだ幼くて、互いの引揚げ先など聞き合うこともせず、戦後十数年を経て父の所へ送られてきた「元山会」の紙上にお父さんの住所を見つけるまで、消息を知ることはありませんでした。

やつと汽車に乗る順番がきて、貨車かもしれなさと覚悟していたのに、思いがけなく客車でした。乗り込むと、大人たちの話で「フツケイにはロスケの大きな隊があるそうだが、監督が意地の悪い人だとそこで降ろされてしまうそうだ。今日はどうだろう？」という声が聞こえました。私は心の中で「どうか、いい人でありますように」と祈り

歩いて元山に帰れ」と命令されました。団長さんが交渉して、同じ歩くのなら、と南の方へ行かせてくれることになりました。私たちの逃避行は、そこから本当に始まったのです。

しばらく歩いて、身を隠すにはあまりにもまばらな林に着いたころにはすっかり日が落ちて、その日はそこで初めての野宿をすることになりました。男の人たちが集まって見張りの当番を決め、女性や子どもたちを集団の中心にして眠りました。朝になって、それぞれの家族は転がっている石などを組み立てて、かまどをこしらえ、鍋や飯盒でご飯を作り、慌ただしい食事を済ませると、すぐに出発です。

いく日、山や川、野原、人里、田畑を歩いたかはつきりしませんが、引揚者の持っている衣類などを狙って、山中を朝鮮の人に追いかけられたり、広い麦畑を横切って向かいの山に入るのに、間断なく山裾の道路を行く北朝鮮がソ連の軍用トラックの目を避けて、何度も畑の中に身を潜めたり、

いくたびか橋のない所で川を渡りましたが、浅いようでも朝鮮の川はなぜか流れがとても速く、また川底の石は丸くて苔が生えていて、つるつる滑り靴が脱げそうになるのです。平野部を流れる川では、いつも「早く、早く」と急ぎ立てられますが、流れに足を取られ思うように前へ進めません。早く行かなければ、このまま置いてけぼりになるのでは、という恐怖心で心臓は破裂しそうでしたが、本当に必死なときは涙など出ませんでした。

集団の中に、ある親子がいました。若いお母さんと背中におんぶした女の赤ちゃん、それにお母さんに手を引かれた三歳ぐらいの男の子でした。坊やは必死に歩きますが、幼児の足ではそれは本当に大変なことです。お母さんの荷物は、片方の手にした大きな袋だけ。とてもオムツを洗っている時間はなく、外したものはすべて捨てるので、袋はだんだん小さくなっていきました。幸い、母が持っていた妹のオムツを分けてあげましたが、そのお母さんは涙を流して喜ばれました。

耕したばかりの段々畑で追い剥ぎに遭い、深い畝に足を取られながら逃げたりと恐い思いもしましたが、ときにはとても親切な朝鮮の方々のお世話になりました。野宿をしていると、「子どもや女性が大変だ。私たちの家に来なさい」と土間に牛を飼っている農家の人が招き入れてくれたり、また炊飯をしていると、パカチ（木製の食器）に入った朝鮮のとても辛い味噌を差し入れて下さった人もいました。

途中二度ほど山の中で朝鮮の学校の傍を通りましたが、前年の八月以来通学していない私は、とても懐かしく、また羨ましく思いました。

あるとき、道中の草原で背丈の高い草の間から、人の足がにゆうつと出ているのを見ましたが、恐らく先に脱出をした人が力尽きて倒れたのだろうと、皆合掌しながら通り過ぎました。

七 いよいよ三十八度線

そしていく日目かの午後のこと、山の中の検問所のような所に出ました。その所長らしき人と

夜になっても、人里近くを通るときは寝ずに歩くのですが、男の子はどうしても眠いのか、歩きながらとうとうとします。おばさんは、なだめながらすかしながら、一生懸命皆に遅れまい、と必死についていきました。子どもたちのお父さんはどうしていたのでしょうか、それともシベリアに連れて行かれたのでしょうか。

そうしたある日のこと、ある山の麓で団長さんが全員を前にして、「この団体はあまりにも大きすぎて、先頭と最後尾が離れすぎて危険だ。今から団体を三つに分けて、百人ずつぐらいにする」というような話をされました。そして、私たちはそれぞれの責任者の下で別々の行動となりました。あの親子とはそこで別れましたが、あのおばさんはその後子ども二人と無事に日本へ帰り着いたのだろうか……、内地に帰ってからも私はときどきそのことを思いました。今は、あのときの若い母親が、どうか穏やかな老後を過ごされているように、と祈っています。

団長が長い間話をしていましたが、やがて団長さんは私たちを集めて「本当は、我々は元山に帰らなければならぬところだが、所長さんのご厚意でこのまま道中を続けられることになった。三十八度線はもうすぐだが、そこには国境警備隊の監視員がいて、脱出は非常に難しそうだ。そこで、所長さんは私たちに安全な所まで案内の人を付けて下さることになった。非常に有り難いことだ。皆お礼を言うように」と言われました。その所長は、子どもの目にもとても尊大に映りました。私たちは皆深々と頭を下げました。あとで大人の人が話していたのは、所長さんにたくさんのお金を渡したということです。

日が西に傾いたころ出発しましたが、しかしすぐに、案内の人はここからは自分たちで行ってください、と帰ってしまいました。結局は騙されたのでしようが、そんなことは言っていられませんが、再び、近いということを感じて三十八度線に向かって歩きだしました。

日はすっかり落ちて、周りの山々が黒々と色を変えたところに、やっと目の前に三十八度線の川が姿を現しました。川幅は思ったよりも狭く見えましたが、流れがとて速くしかも深そうで、歩いて渡るのとはとても無理でしたので、船を雇うことになりました。船を出してくれる朝鮮人は、その場所の川上、川下の双方に橋があり、監視員がいるから「静かにするように」と言いました。南朝鮮を目前にして、これまでの苦労が水の泡になつてはという思いから、皆黙り込みました。

辺りはますます夕闇が濃くなりましたが、一向に乗船できる見通しが立ちません。やがて責任者の人が、「船賃をだんだん吊り上げられるが、ここで引き返すわけにはゆかない。皆で協力しましょう」と言われました。「そうだ、そうだ」と、出せる人は皆お金を出し合い、やっと一艘の船で何回かに分かれて乗船することになり、私たちも三度目に乗ることができました。一緒に乗船した一人のお婆さんが、「ヨイショヨ！ヨイショヨ！」と自分

それからは皆安心して近くの駅を目指しました。

でもそのころには、母の足は疲れと栄養不足で脚気のようにすっかり浮腫むくんでいたのと、安堵感から一団にずい分と離れてしまつて、私は取り残されてしまう不安でいっぱいでした。

また、来る日も来る日も背中中で太陽にさらされていた赤ん坊の妹は、目をすっかり傷め、顔の皮膚はまるで老人のようにひび割れてしまいました。名前は憶えていませんが、ようやく最寄りの駅に着いて、まず石炭車で京城まで行き、ひとまず引揚者のお世話をして下さる施設に入りました。

そこでの食事は、一日二食、お碗一杯のコウリヤンのお粥と沢庵二切れでしたが、そのお粥はひと口ごとにガジガジ、と砂を噛むようなもので、お腹を満たすにも大変な努力が要りました。それから、今度は屋根のついた貨車で釜山に向かいました。乗車するとき、アメリカ兵が女性や子供の手を取って乗せてくれたので、ロスケとの違いにびっくりしました。

の杖で川底を突いていましたが、だれもが監視員に見つからずに一刻も早く南朝鮮に渡れるようにとの思いだったのです。川の深さは、その杖がほとんど隠れるほどでした。

最後の一団が下船したとき、だれからともなく拍手が沸き起りました。そして、その渡し船が岸を離れて北朝鮮に引き返すときには、船賃を吊り上げられたことなど忘れて「ありがとう！さようなら！」と、感謝の聲が上がったのでした。その夜はすっかり暮れていたもので、近くの山中で野宿をしました。

八 引揚船

夜が明けて、いよいよ南朝鮮の地を歩き始めました。南朝鮮では、日本人も逃避行をしなくてもいいらしい、ということは何となく恐る恐るの行進でした。しばらくして出くわした朝鮮の人に、団長が「日本人でも汽車に乗れますか？」と訊ねたら、「だれでも乗れますよ」ということで、

釜山に汽車が着いて港の船を見たとき「ああ、これでやっと日本へ帰れる！」という気持ちになりました。何日そこには憶えていませんが、船が出航して朝鮮がだんだん遠くのを見ていると、子供の心にもある感慨が湧くようでした。

九 とうとう日本に

出航した翌朝は、玄界灘が大荒れで、ほとんどの人が船酔いに悩まされ、ぎゅうぎゅう詰めの船室では、あちこちで嘔吐が始まりました。

嵐が収まり船酔いも一段落すると、そこは子供のこと、船の中を好奇心いっぱいに探検しました。船の厨房では、若い船員さんが箱のような金属の釜で、蒸気でご飯を炊いていました。その壁際に、五、六個のコップにレンゲの花が挿してありました。

日本に到着する前に船内で疫病が発生し、老人や赤ちゃんが三人亡くなりました。赤ちゃんは小さな柳行李に入れられて、十文字に縄を掛けられ、水葬にされました。赤ちゃんのお母さんはデッキ

の手摺りに取り纏すがって、「ここまで帰ってきたのに……」と泣き崩れました。掛けられた縄の結び目には、あのレンゲの花が挿してありました。

とうとう、とうとう日本に帰り着いたのです。

博多の灯が見え始めると、人々は争うようにデッキに出て、食い入るように見つめていました。泣いている人もいました。

すぐに上陸できる、と思いましたが、予想に反して、船はそれから五日間ぐらい港の外に停泊したままでした。その間、船内ではDDTの白い粉を全身に振り掛けられたり、いろいろな予防注射をされたり、また夜には甲板で余興大会が開かれたりしました。

ようやく上陸が許されました。波止場には、私たちが降りたあとの船で韓国に帰国する朝鮮の人々がたくさんいました。「ああ、ここが日本なのだ！」と、とても嬉しかった。

上陸後初めての夜に、どこかの大学の学生が、私たちを慰問に来てくれました。そのとき「今、

して母の症状が快方に向かい始めたころ、高松から母の次兄がお米を持って迎えに来てくれました。父は、仕事の関係で不在だったそうです。

翌日、伯父に連れられて別府から船に乗り、高松を目指しました。安達のおじさんは、「白石さんに、奥さんたちを渡すまでは責任がある」と一緒に来てくれることになりました。

船は瀬戸内海に入り、翌朝早く伯父が「もう、屋島が見えてきた」と言いました。すると、横になっていた母が「えっ、本当に？」と跳ね起きて、デッキに飛び出して行きました。私は慌ててあとを追いました。「ああ、屋島が……屋島が……」とあふれ出る涙を拭おうともせず、母は食い入るように美しい形の山を見ていました。母が生まれ育ったその地は、とても優しく美しい姿でした。

一九四六年五月四日に始まった私の生涯でも最も変化に富んだ旅は、五月二十六日の夜明けでそのすべての旅程を終えたのでした。

あとがき

日本で一番流行っている歌です」と歌ってくれたのが、「リンゴの唄」でした。いろいろな歌を歌ってくれた最後に、「この歌は、現在日本では歌うことを禁じられていますが、今日はご苦労の末に帰国された皆さんのために、特別に当局の許可を得て歌わせていただきます」と歌い出されたのは「荒城の月」でした。私には初めて耳にした歌でしたが、何か胸が熱くなったのを思い出します。大人の人は皆涙を流しました。

帰国の手続が済んで、そこで解散になりました。一緒に帰って来た美代ちゃんともう一人の男性は、母に深く感謝しながら鹿児島に向かいました。

母の脚が脚気のために大変な状態になっていたので、安達のおじさんが別府に行こうと言い出して、私たち家族はそちらに向かいました。その汽車の中で、国防服の男性が蒸かしたサツマイモを私の弟にそっと手渡してくれました。旅館に着いてから、高松市の母の実家に電報を打ちました。日本に帰って来た安心感もあつてか、二、三日

その一

私の記憶に残る「元山脱出」の経緯は、以上のようなものです。

長じて、北村さんや安富のミッチャンと連絡が取れて話をしていても、ほとんどの人が担任の先生や友達の名前すら思い出さない、あるいは元山にいたことさえ忘れていてという人もいるのに、なぜ私がこんなに詳しく憶えているのかと自問しても、その理由は分かりません。かつて兄などにも「本当に憶えているのか？ お前の作り事か、夢を見ているのではないのか」と茶化されたことがあります。兄の言う通り、逃避行の恐怖からいつまでも自分の中に物語を作っているのか、とも考えたりしています。「フッケイ」「リボク」という地名も本当は実在しない「私の想像上の場所なのかしら」と、朝鮮の地理を知らない私は迷っています。引揚げ後しばらくの間は、「また、逃げる夢を見た」とか「あれも持って帰りたい、これも持って帰りたいなんて、欲張った夢を見た」など

と言っていた母が、昭和五十年代に入り、私が初めて「泉友」（泉町国民学校の同窓会誌・村上先生が、戦後ご苦労の末、全国から卒業生、当時の在校生の消息を掘り起こし、作って下さった会）を手にしたところ、それを見ながら母に以上のような思い出話をしたときには、母は「ええ、そんなことあったかしら……」と、自分が経験した苦労をさっぱりと忘れてしまっていたのです。ただ、今から思えば父がいなかったために、兄とともに私がしつかりしなければ、という責任感のようなものが私の心を支配していて、いつも大人の話に耳をそばだてていたのは確かです。

母は背には大きなリュックサック、手にも妹のオムツなどを入れた袋を持ち、四年生の兄もまた、地に着きそうなほどの大きなリュックサックを背負っていたために、どうしても一団の後方に下がりがちになるので、逃避行の間ほとんどのとき、私が一行の先頭近くについて、頭の先に方向を示す磁石の付いた杖を持った団長さんの行動を、いつ

日を境に、多くの人の温かな人間性と偶然に助けられたお陰と感謝しています。

・お向かいの安富さん一家

昭和二十年一月に父が出征したあと、母は大きなお腹を抱えながら店（寿司屋としての営業は既に不可能で、終戦直前は食券を持った人に「パンとみそ汁」の昼食のみを提供する状態）を切り盛りしていました。何しろ子供ばかりの家庭で、頼みとする父はおらず、ロスケの進駐した直後からは安富さんのおばさんが「どうぞ、うちへいらっしやいね」と恐縮する母を自ら迎えに来て、夜ごと繰り返される略奪、暴行から私たちを守って下さり、後日太閤堂へ移るまで毎晩お世話になりました。また、世話人会から回覧板が回っていましたが、その詳しい情報もおばさんが教えてくれました。引揚げの際も、手助けの男性を見つけて下さったり、運動靴の手配など、その様々な配慮は母を勇気づけてくれたと今も感謝しています。

・安達のおじさん

も注視しているようなところがありました。

これを書いていて、思い出したことがあります。逃避行の初日、野宿をするにも、人目を避けるための場所を探して、みんな疲れた身体で随分歩きました。が、なかなか適当な所が見つからず、最後の場所で大人たちが「ここにしよう」「いや、ここでは危険ではないか」などと長い間話し合っていたときのこと、皆に背を向けて兄が少し夕焼けの残る向うの空をじっと見ていたので、私は後ろから近付きました。私の目に映ったのは、目にいっぱい涙を溜めた兄の顔。「哲ちゃん、泣いているの？」と聞いた私に「泣いてないっ！」と、怒ったようにくるりと背を向けた兄。自分の身体ほど大きなリュックサックは肩に重く食い込んでいたのでしょうか、「自分は長男だ……」という思いから、弱音も吐けずに我慢していたのでしょうか。

その二

今振り返ってみれば、現在の私たちが穏やかな日々を過ごせることができますのは、あの敗戦の

この人は、父が戦前大阪に一時帰省して、三年ほど修行したお店にいた人で、「いさみ」を開店するにあたり手助けしていただくために、一緒に元山に同行してもらい、数年後緑町に「第二いさみ」を暖簾分けした方です。危険な脱出の際、自分のご家族をひと足先に船で脱出させ、私たち親子の準備が整うまで残ってくれたのです。我が家と比べてお子さんが大きい方ばかりとはいえ、船の脱出の成否も不確かな中、それを理解して下さった安達のおばさんにも、心から感謝しています。

・飯山オモニ

この人のことは、思い出すたびに熱いものがこみ上げてきます。私が憶えているのは、昭和十六年生まれの子を、いつも朝鮮風のおんぶで腰に括り付け、くるくると忙しく立ち働いていた姿。戦後、太閤堂の一室に移ってからもほとんど毎日のように母を訪ねて来て、着物を売る手伝いをしてくれたり、ときには魚や朝鮮漬、朝鮮の餅など、食べ盛りの子供を抱える母を力強く支えてくれま

した。あるとき、母が「ねえ、オモニ。こんなにしてもらっても、今は何もお返ししてあげられないわ」と済まなそうに言うのと、オモニは次のような話をしました。「いいえ、私たち従業員がタイシヨウや奥さんから受けたご恩は、こんなことで報いることができるものではありません。私が夫を亡くし、その両親と幼子四人を抱えて大変だろうと、月に二度帰宅するときは、両親への暖かい着物やお米などをいつも持たせてくださったり、奥様もこちらの子たちの服を作るときなど、同じようにうちの末娘にまで揃えてやって下さいました。また(一人の従業員)『サブちゃん』『イツちゃん』たちが貧しい家庭の子供で、給料をもらってもほとんど仕送りするので『お小遣いがないだろう』と、タイシヨウは『これで映画にでも行きなさい』と言って、毎月半ばには自分の子供のように小遣い銭をやってくれました。『私も六歳で両親を亡くしているので、寂しい思いをしたからね』と仰いました。『奥』

先生は、「私たちがこのように平和な毎日をごせるのは、苦しい脱出ではあったが、あの三八度線に、その当時『鉄条網』や『地雷』が敷設されていたからだと仰いました。もしも、あと二年引揚げが遅れていたらと思うとき、世界中の紛争地を見るにつけ、このことは切実に胸に迫ります。

あれから六十年の歳月が流れ、今の時世にもそれなりの苦しみや悲しみがありますが、どうかこれからの人々には、このような体験をしない人生を歩むことができるよう、国の指導者の賢さを心から願っています。

様たちがご無事にタイシヨウの元へ帰られるよう、私は神様に毎日祈っています」と言い、母とともに涙を流しました。

国こそ違え、人の真心はこのように通じ合えるものだ、とオモニを懐かしく思い出しています。

今ごろは、きつと天国で私の両親とまた仲良く楽しいときを過ごしているのでしょうか。

・ふるさとの人々

引揚げ後は、母の実家(次兄の家)に落ち着きました。伯父夫妻は共に教師で、戦前は大地主の家柄ながら、戦後は農地解放で大部分の田畑を失い、こちらも大家族でしたが少ない作物を分け与えてくれるなど、本当に温かく迎え入れて下さいました。私たち家族は、再出発の土台が整うまで、実に八年間もその家の離れにお世話になりましたが、今も伯父の子供たちとはまるで兄弟のように付き合える日々を過ごせることを、有り難く感謝しています。

・村上先生の教え

十歳の目と足

徳島県 稲井 清

はじめに

かつて、フランキー堺さん主演の「私は貝になりたい」というタイトルの映画がありました。私も六十年間、ひたすら貝になり、二枚貝の蓋を固く固く締め、敗戦前後の話は妻子はもとより孫にも、ましてや友人や知人にも一切話ることなく、あえてその話題に関しては反らし過ごしてききました。その大きな理由は、朝鮮からの引揚げというだけで相当きびしい差別といじめに遭ったからです。自分自身を守るためには「貝」にならざるを得ませんでした。

この、二枚貝の固い蓋を開けて下さったのは、長姉美津子の友人で現在東京在住の、中村登美枝様の「生きて帰れよ」の自伝書を拝読するチャンスに恵まれ、自伝書の一語一句に大きな感銘を受